慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	動物憑依の諸相 : 佐渡島の憑霊信仰に関する調査中間報告
Sub Title	Some aspects of animal possession : a interim report of field research about the belief of possession in Sado Island
Author	中西, 裕二(Nakanishi, Yuji)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990.) ,p.45- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

動物憑依の諸相

——佐渡島の憑霊信仰に関する調査中間報告——

Some Aspects of Animal Possession:

A Interim Report of Field Research about the Belief of Possession in Sado Island

中西裕二
Yuji Nakanishi

In Japanese folk societies, a racoon dog is often thought of as a creature which deceives and possesses human beings. A creature which is take up as the case in this paper is *Mujina*, a kind of a racoon dog, living in Sado Island, Niigata Prefecture. Roughly speaking, *Mujina* has two characteristics, supernatural and social one. For example, it is said that they have a personal name, marry out, have a hieracry among themselves and live with their family, however, they also do harm to the natives with their supernatural power to result from envious feeling. But, these characteristics are also shared with the humans. Only understanding the dual characteristics of *Mujina* and those of the humans, and the interactions among them, we can approach the world view of Sado Islanders.

1. 序

日本の民俗社会における最も馴染み深い動物として，我々は狐と狸を挙げることができよう。この両者の性質には類似点が多い。その中でも，従来の民俗学・文化人類学の研究は，共に人間に憑依したり人間を化かすという超自然的な能力を持つ，いわゆる「憑きもの」動物であるという点に注目してきた[1]。憑きもの動物としての狐狸(こり)は，地域によって狐狸の名称や形態に偏差があるという点（オサキ・イズナ・犬神・人狐等），そしてある地域では家と複合した「憑きもの筋」「憑きものもち」という家筋を形成するという2点を特徴としている。しかしながら，現地調査に基づいて特定社会の文化体系における狐狸と人間との関係を扱った研究は残念ながら少ない。民族誌的研究としては，憑きもの筋の社会的意味を記述した民俗学者・文化人類学者による若干の報告が存在するだけである[2]。だがこれらの民族誌的報告は，村落構造やその動態と憑きもの筋あるいは憑きものもちの家との関連を，社会学的・文化人類学的視点を用いて分析している点で，高く評価されるべきである。

本論は，佐渡島の一地域（本論ではN町と呼ぶ）において貉(わじな)と呼ばれる動物による「憑きもの」の事例を取り上げながら，N町において諸々の形態をとる「憑きもの」現象の中でも，特に貉という動物が原因とされる事例について述べ，若干の考察を加えることを目的としている[3]。貉のような，いわゆる狐狸のカテゴリーに属する動物による「憑きもの」を分析する際，従来の分析方法は，憑きもの筋の家が存在する場合は前述の視点から，そうでない場合は憑依現象とその治療者（巫女，行者など）に関する宗教学的・民俗学的分析が中心であった。しかし本論では，貉は家筋の観念と複合せず，従って社会構造と結び付かないという点，また，貉に関する観念や「貉憑き」を理解するためには，まず初めに調査地の文化的枠組の中での検討が不可欠であるという点から，従来のアプローチは採用しない。本稿では，貉の諸特性と貉憑きという現象を通して，日本のある民俗社会における「憑きもの」現象の一端を示すことを目的とする。

2. 貉の属性

佐渡島においては，狸のことを貉と呼ぶと言われてい

るが，貉と狸は全く別種であるという観念が調査地の人々には強い。貉について述べる際，人々が「ムジナ」とは呼ぶことはまれで「トンチボ」「ムイナ」という呼称を用い，また「十二さん」「山の神」とも呼ばれる。筆者が調査したN町では，ほとんどの人が「トンチボ」という呼称を用いている。

貉は中型の犬とほぼ同じ大きさで，毛の色は茶・赤みがかった黒・よもぎ色などであり，尾が太いと言われている。貉の形態上の特徴として最も多く語られるのは，狸の顔は丸いが，貉の顔は細長い，あるいは口先が尖っているという点である。この顔付きの相違が，貉と狸は別種であるという理由になっている。貉の住む場所は主に山であるが，正確には穴に住むという点を特徴としている。そのため，里に近い所の穴や海岸沿いの岩礁地帯の穴が貉の住家とされる場合もあり，厳密に山の動物とは断言できない[4]。人がよく貉と出会う時間帯は，明け方・夕方・夜・雨の日などがある。好物は揚げ物・魚・小豆飯・酒などとされ，この点は狐と類似している。

貉について語る場合，その顕著な特徴の一つは，貉は現地の動物分類においては，他の哺乳類と同様「四つ足」「畜生」のカテゴリーに分類される一方，超自然的能力を持ち，しばしば神として祠られる点である。伝説においては，貉は狐との化かし合いに勝ち，それ以来佐渡には狐が一匹もいないと言われており[5]，貉に化かされたという類の伝承は，島内に無数にある。N町においても，貉に憑かれた，化かされたという伝承は数多く，現在においてもそのような経験をした人は多い。それとは逆に，貉は現世利益的な生き神として，佐渡島内において広い信仰を集めている。佐渡島内にある十二社権現は，一般に貉神を祀る社と言われており[6]，その他にも貉神を祀る神社は数多い。相川町相川の二つ岩大権現はその代表的なものであるが，参道に奉納された百数十本の鳥居の列は，その信仰の広さを物語っている。また，佐渡島内には「アリガタヤ」「ドンドコヤ」と呼ばれる，問い聞きや憑きもの落としを行なう宗教職能者がいるが，アリガタヤの中にも貉神を祀る者が多く，彼らはその力を借りて依頼者の願いに答える。このように，貉の超自然的能力に関しては，憑く・化かすというネガティブな側面（貉に化かされた話は，もちろん幾分ユーモラスに語られることもあるが）と，現世利益的な生き神としてのポジティブなの側面が共存している。だが，貉神を祀るアリガタヤや貉神の信仰者の中には，この両面を貉の種類の違いと見なす人もおり，人に憑いたり化かしたりする貉はいわば「野良の」貉であり，神としての貉は人格を持ち悪さをしないという。しかしそう語る人々も，貉神は他の神々と比べて位が低い神だという点は認めている。

貉のもう一つの特徴は，貉の属性や生活が人間のそれと類似しているという点である。具体的に言うと，まず第一に，神として祀られる貉や再三人間を化かす貉には，名前があるという点が挙げられる。前述の二つ岩大権現には「二つ岩の団三郎」という貉が住んでおり，信仰の対象になっている。その他，「関の寒戸」「東光寺の禅達」「高橋のおろく」など，名前を持つ貉の数は多く，佐渡全島ではその数は百数十匹にものぼる[7]。第二点として，特に名前を持つ貉同士の関係はハイアラーキカルであるという点を指摘することができる。二つ岩の団三郎は，佐渡貉の頭領あるいは親分と考えられており，彼は多くの貉を挙族として従えているとも言われている。また，佐渡全島にまたがる，一種の貉のランキング表とも言うべき「佐渡貉番付」も作られている[8]。第三の特徴は，貉は家族や家を形成すると考えられている点である。これはN町とは別の地区の話だが，貉は母貉一匹と子貉二匹で行動するという。また名前を持つ貉の話の中には，しばしば分家や婚出など，人間の「家」を連想させるものがある。例えば，二つ岩の団三郎の妻は新穂村大野の「高橋のおろく」という貉で，その嫁入りの時は提灯の火が長く続いたと言われ，その貉の子は新穂村潟上の「湖鏡庵の財喜坊」であるという伝承がある[9]。筆者が調査したN町の貉神を祀るある神社も，二つ岩の団三郎から嫁が来て，その嫁入りの際に持ってきた樽が神社に残されており，そこで生まれた雌の貉三匹は，それぞれ他村の貉に嫁入りしたという。また，佐和田町上矢馳にいたと伝えられる「初右衛門貉」は，一族が繁栄し，佐渡中に38軒の分家を持つようになったという記述があり[10]，西三川村椿尾の貉「鵜掛の長老」は，分家ではないが四ケ所に移り住んだといわれる[11]。

以上に述べた超自然的属性と，一種の社会性とでも言うべき属性は，貉について語る際不可欠な要素である。この点をより明確にするために，貉と他の動物と比較してみよう。村落レベルにおいては，「憑依し化かす動物＝貉」という等式が成立するが，アリガタヤにおいては若干異なる。あるアリガタヤによれば，貉以外に憑依する動物には牛・猫・蛇等がいて，基本的に四ツ足の動物は全て人間に憑く可能性があるが，それでも人間に憑くのは貉が圧倒的に多いと言う。また，貉以外の動物に化かされたという伝承はほとんど無く，調査においてもそのような話は耳にしなかった。しかし，貉と他の動物の

決定的な差異は，やはり貉の持つ社会性であろう。貉以外の動物には，上述の名前，階層，家という要素は登場しない。また，貉の行動には，指先が達者である，子供を背負う，後ろ足で立つ，こちらを振り返ってお辞儀をする等の，人間的なしぐさが目立つが，他の動物にはそのような点は認められない。

以上の点から，貉は基本的に「畜生」「四ツ足」のカテゴリーに分類され，そこでは動物／人間の差異が強調されるが，一方でその社会的属性においては動物／貉の差異が強調されている。従って，貉は両義的あるいは多義的性格を持つ動物と言えよう。N町の現地調査中，貉は「ケモノであってケモノでない」動物だと言う説明をしばしば受けた。これは，上記の点を見事に指摘している。

3. 貉と人間の諸関係

前章では貉の一般的属性について概略したが，本章においては人間と貉についての関係について，「憑きもの」現象を中心に現地調査で得た具体的な事例を提示していくことにする。

調査を行なったN町は，佐渡島内でも貉神の神社や小祠が比較的多く，貉に関する伝承・経験談を多く得ることができた。調査で得られた「憑きもの」現象の事例は全部で66例あり，その半数が貉と関係しており，残りが生霊憑き・呪詛・死霊憑き・神の祟りなどとなっている.

まず調査地での最初の驚きは，必ずしも全員とは言えないものの，人々が貉について忌避的な態度で語ることが少ない点である。これは，他地方の憑きもの動物（例えばオサキ，犬神など）の調査においては，調査地で直接それらの動物の名を口にすることさえタブーとされる点と対象的である[12]。ここから，N町の人々は貉についてネガティブな感情を強くは持ってないとも考えられる。次に，N町の人々の貉の認識であるが，彼らにとって貉は決して想像上の動物ではない点を強調しておくべきであろう。貉に化かされたり憑かれたりすることは，勿論彼らにとっても異常で非日常的な経験であるのだが，貉を見かけること自体はごく日常的な経験なのである。

さて，本章において取り上げるのは，N町の人々が貉との間に実際に相互作用を経験した事例，あるいは直接経験した人から聞いたり，その事態を見た人々の事例である。その相互作用には，大きく分けてa）貉が憑く，b）貉に化かされる，c）a，b以外の貉との接触，の三つのパターンがある。本稿においては，この三つの形態を貉による「憑きもの」現象と捉えることにする。以下，順を追ってこれらの事例を示していく。

a）貉が憑いた事例

本調査において，この事例は16例が収集できた。一般の人々と，憑いた貉を落とす役割を果たすアリガタヤの間には，貉の憑依についてある程度共通した認識がある。それは，異常な行動や精神錯乱をしばしば貉が憑いた症状だと見なすという点であり，これを調査地の人々はよく「貉がさわっちょる」「馬鹿になる」などと表現する。具体的には，訳のわからないことを喋る・話しかけてもボーッとしている・四つ足で走る・部屋の中で排便をする等，異常な行動や動物的なしぐさのほとんどは，貉が原因だと見なされる傾向にある。その他に特徴的な症状は過食であり，貉に憑かれた人は異常な量の食べ物を欲しがり食べるという。それは，貉が食べ物を欲して人間に憑いのであり，そのような場合は食べ物を食べさせるだけ食べさせれば貉はじき落ちる，と言われている。

これらの点に留意しつつ，調査から得られた16例のデータの内容を見ていこう。まず貉に憑かれた人の内訳は，話者本人4例，話者の親族・親戚5例，話者の住む村の人6例，村外の知人1例となっている（故人を含む）。貉は男性より女性に憑き易いと言われるが，この16例のうち，女性に憑いたケースは5例に過ぎない。次に貉に憑かれた症状であるが，上記の精神異常を引き起こしたケースは16例中5例に過ぎず，7例は病気などの身体的不調で，その他はその後の不幸（1例），病気で死亡（1例），その他（2例）となっており，必ずしも貉憑き＝精神的異常と見なすことはできない。ここで，具体的に幾つかの事例を示そう。

〔事例1〕　Aさんが子供の頃，山の桜の木を折って持ち帰った。帰宅してからもぼっとして，人の話しも聞こえないようである。馬鹿になって駄目になってしまった。（親が）アリガタヤと一緒に，貉神を祀る祠に行き拝んでもらった。するとトンチボ（貉）が出て「俺の遊び木を折ったな」と言った。そこで小豆飯を炊いて魚を添え，例の桜の木のところへ持って行って謝った。家に戻ると彼女は治っていた。

これは貉に憑かれ「馬鹿になった」，即ち精神的に異常な状態になった事例である。次の事例も精神に異常をきたした女性の例である。

〔事例2〕　B峠の細い道の頂上に地蔵があり，昔は道中そこで休むものだった。煙草屋の亡くなったバア

チャンがC地区に行き，お土産をしょって帰って来てそこで休んでいた。D地区から帰って来たEさんの娘と一緒だったので，そこでお土産を開けて食べた。食べる前は後ろにめくる（＝投げる）ことになっていたが，それをやらなかった。そのバアチャンは家へ帰ってから気が触れてしまった。アリガタヤに見てもらうと，峠の頂上で娘さんがやれというのにやらなかったためである。

この事例では具体的に貉は出てこない。だがこれは貉憑きの例として語られており，その特徴をよく示している。N町には，人が食べ物を持って歩く際，貉が住むとされる，あるいは貉がよく出る場所に差し掛かると，持っている食べ物を分けるべきだという観念がある。また，山仕事をする際も，昼食の弁当を少し貉に分けるという。事例2の舞台となるB峠も，貉が住む場所だと言われている。基本的に貉は食べ物欲しさに人に憑くという説明を受けるが，貉に憑かれたケースの中で，食べ物が原因となっている例（5例）の全てが，上記のルールに従わなかったためとされている。この例を見る限り，貉は食べ物が欲しくて人をす騙と言い切ることはできない。むしろ，貉のいる場所を通る時は貉に食べ物を与えるべきなのである。だが，基本的に貉のこの性質は，調査地においては否定的に受け取られる傾向にある。即ち，貉が人の食べ物を欲しがるのは，貉の持つ妬み心や貪欲さから来ると解釈されている。

次に，精神的異常を伴なわない身体的不調の原因が貉憑きであったケースと，「憑きものと」分類するのが妥当かどうか判断のつきかねる，いわば「境界例」のケースを示そう。

〔事例3〕　4，5年前，F家の者が急病になった時，アリガタヤに見てもらった。すると貉が出て「山で寝ているところを起して邪魔した上，魚を持っていたのにちっともくれなかった」と言った。それでお供えを夕方，人目に付かないようにして，指示された場所へ供えてくると病気は治った。

〔事例4〕　GさんとHさんの乗った車が，I地区のちょっとした坂で動かなくなってしまった。故障もないのにおかしいと思ったら，トンチボがうろうろして邪魔をしている。GさんがHさんに聞いてみると，実は魚を預かっているという。トンチボが十二さん(貉神を祀る祠)に魚をあげてこいと言うので，魚を半分あげると車は動いた。

事例3で示したような，病気の原因をアリガタヤに調べてもらうと，貉が憑いている，あるいは貉が直接出てきて(アリガタヤに憑依して)原因を話すケースは，身体的不調の原因が貉憑きとされる場合の，典型的なプロセスである。このケースは7例あり，病気で死亡(1例)，その後の不幸(1例)というケースを含めると，全部で9例ということになり，前述した精神的異常のケースより多いことが分かる。また，事例4のケースは，本人の身体的不調ではなく，彼の乗っている車の不調の原因が貉ということになる。同様の事例はもう1例あるが，どちらも当事者の車の故障ということなので，本人の身体的不調と同義と解釈し，「貉憑き」に分類することにした。

b)　貉に化かされた事例

貉に化かされたという伝承は佐渡島内には枚挙に暇がなく，N町においても豊富である。また，現地調査においても，貉の話を始めると即座に帰っまくる言葉が「化かす」であるが，その内容は「昔は」貉に化かされる人が「多かった」というものが大半であり，その詳細に関しては不明な点が多い。そのため貉に化かされた話は，性格上民俗学で言う世間話に属するものが多く，インフォーマント本人やその知り合いが貉に化かされたと明確に言える事例は，本調査では13例に過ぎない。これらの事例の中にも，世間話的な話が3例あり，その内の1例は以下の通りである。

〔事例5〕　4，50年前のことである。I地区のJという男がこの辺を通った時，かすりの着物を着た小さな男の子に会った。Jはその子に案内され，立派な家の中に入った。が，気が付くと現在井戸のある辺りで寝ていた。その後，Jはそこに祠を建て，貉を祀った。

貉の化かし方については，伝説と経験の間にほとんど差はない。川や肥え溜めを風呂だと思って入る，女性に化けた貉に騙される，食べ物がなくなっている，同じ所をぐるぐると回っている，貉に供応される等で，これらは佐渡の民話・伝説集の中にも登場するモチーフであり，調査で得られた事例においても登場する。そこで，残りの10例を見ていこう。

10例の内，化かされた人の内訳は，話者本人6例，話者の世代の上の親族1例，話者の村落内の人2例，その他1例である。貉に憑かれる人は女性が多いと言われるが，化かされる人間には一定の傾向はないようである。しかし調査事例の中で，女性が単独で化かされるという話は1例のみであり，化かされるのは主に男性に多いようである。以下に，事例を幾つか見ていこう。

〔事例6〕　Kさんが妻とともに山に入った時，辺りが

急に暗くなった。すると遠くで貉の遊ぶ声が聞こえる。藁に火をつけようと思ったがなかなかつかない。林道に下がったら暗いはずなのに明るかった。その時初めて貉の仕業だと分かった。これは，妻が持っていた食べ物を貉にやらなかったからである。

〔事例7〕 Lさんが貉を蹴ったら，仕事の帰り，お堂の所で牛をいっぱい連れた馬喰に会ったという。それがLさんの前を通り過ぎては消えていったという。

その他の事例での貉の化かし方は，貉を鉄砲で撃とうとしたら自分の子であった，同じ所をぐるぐる回る，食べ物を取られる（2例），女性に化けた貉と会う（2例），追っかけられる，山の御殿に案内される，知り合いが死んだと言われる，となっている。貉に化かされた場合は，憑かれるのと異なり，本人が直接物理的・身体的被害を被ることはない。そのため，一種の笑い話のように語られるケースも出てくるのであろう。

c) a，b 以外の貉との接触

人間と貉の相互作用のほとんどは「憑く」か「化かされる」であり，その他のケースは少ない。これに分類される事例は5例あるが，その内，2例が貉の嫁入り行列や，そのたい松の火を見たというものである。残り3例のうち，1例は貉に遭遇した例で，それは以下の通りである。

〔事例8〕 今から50年ほど前，Mさんという貉捕りの名人がいた。ある穴に白いたすきを掛けている貉がいるという話を聞いて，犬を2匹その穴に入れた。しかしながらなかなか犬が戻らず，結局2匹共くたくたになって戻ってきた。そのあと，貉の本尊が出てきて，Mさんを睨みつけた。彼は腰が抜けてしまい，それから貉捕りを止めてしまった。

最後の2例は，いわば貉の恩返しの事例である。これは次の通りである。

〔事例9〕 Nさんは貧しかったが，山道を歩く時はいつも「何か食え」と言って，貉に食べ物をやっていた。するとある晩，貉が目を光らせて，帰り道を案内してくれた。畜生も馬鹿にすべきではない。

〔事例10〕 貉神を祀る神社の屋根の葺き替えをした時，屋根の上に四ツ足が出て来て，人足に御礼の挨拶をしたという。畜生でも感謝の気持があるものだと，感動のあまり涙が出た，とその人足が語っていた。

この事例9と10の貉の性格は，前章で指摘した貉の社会的性格を示すものと考えられる。この「貉の恩返し」の話は伝承においても多く存在する[13]。

d) 事例からの若干の分析

ここでひとまず，これまでの事例から可能な分析を試みてみよう。第一点としては，貉が憑いているかいないかの判断に，アリガタヤという宗教職能者が深く関与している点を指摘することができる。特に貉憑きのケースにおいては，精神的異常の症状が認められればその判断は容易であるが，身体的不調の原因を判断するのはアリガタヤであり，クライアントではない。よって貉に対する信仰は，アリガタヤを通じて強化され，再生産されていると言える。

第二点として，上記のa），b）の事例に関して，貉とそのような相互作用を持つに至った原因を考察する必要があろう。貉に憑かれたa）の事例に関しては，10例の災因が分かっており，その内訳は，①貉の領域を荒らした（工事をしていた場所が貉の巣だった，貉の遊び木を切った，貉が寝ているのを邪魔した等）……6例，②貉に食べ物を与えるべきところを，与えなかった……3例，③食べた貉が神様だった……1例，④貉の祠をきちんと祀っていなかった……1例となっている（10例の内1例が①と②が災因だったため，合計すると11例になる）。b）においては，原因の分かる事例は4例しかないが，①貉に食べ物を与えるべきところを，与えなかった……2例，②貉捕りをしていた……1例，③貉を蹴り飛ばした……1例という結果になっている。両者を合わせるとその災因の大半が，貉の領域を荒らした，あるいは貉に食べ物をあげなかった，ということになる。

しかしながらこの災因の結果を考察する上で，これらがN町の文化体系の一端を示すものと見なすことが可能であるか，という問題が残されている。災因は常に解釈であり，その解釈を行なうの主体者の多くは特殊な宗教職能者である。しかも，彼らあるいは彼女らが，クライアントと同一の文化体系・観念体系を共有しているとは限らない。逆に，外部の知識を積極的に受け入れ，それを元に災因を解釈するという可能性も大きいのである。N町においても，貉との関係の解釈においては，上述の通りアリガタヤという宗教職能者が深く関与している。しかしながら，N町のアリガタヤはほぼ全員がN町で生れ育ち，同様な生活史を持つアリガタヤの下で，N町において修行をしたという経緯を持つことから，上記の災因の解釈をN町の観念体系の一部と見なすことが許されるだろう。

まず，貉の領域を犯したことが災因とされる事例であるが，これらは主に山中で起きた出来事から貉憑きという判断が下されている。この点においては，貉は山のカテゴリーの属し，それは人間の住む領域としての村と対立する概念である点が読み取れる。また，これらの災因はクライアント自身の行為が直接の引き金となっており，貉がむやみに人に災いをもたらす訳ではない，という点も指摘できる。以上の点から，人間は自己のカテゴリーと貉のカテゴリーの区分を認識し，それに従い行動を行えば不幸には陥らないことを示していると言えよう。

もう一点の，貉に餌をやらなかったということが災因とされる事例だが，この事例は一体何を意味しているのだろうか。我々の調査したN町の村落は，海岸線にそって点々と散在し，どの村も背後に山々が迫っているという景観を持っている。このような環境では，人々は当然生活の糧を海と山に求め，実際山は現在でも彼らに重要な生活手段を与える領域である。また，人が村を一歩でも離れて，隣村にでも行こうものなら，峠を越さなければならない。つまり彼らは日常生活の諸場面において，常に貉と出会う状況の下で生活をし，貉のカテゴリーを侵犯することになる。そこにおいて，餌を与えるという行為は，二つの機能を持つと考えられる。一つは，人間／貉のカテゴリーが明確になる点である。換言すればこのカテゴリー間の差異は，餌を与えるという行為によって初めて認識可能なものになるといえよう。第二の機能は，この行為によって人間は貉を自己の論理の中に組み込むことができるという点である。なぜなら，貉は家畜のように与えられた食物をただ食べるのではなく受け取るのであり，事例9で示した通り，その行為に対する反対給付をすることさえある。また，貉のネガティブな面，即ち人の食べ物を狙う妬ましさも，こちらから先に食べ物を出してしまえば避けることができる。よって，この餌を与えるという行為によって，人間は初めて貉との間に文化的コードを設定することが可能になり，また，貉を自らの論理に組み込むことが可能になる。しかしそれを行なわなかった人間は，貉の前で無防備なままなのである。

4. 考　　察

これまで，佐渡島の人々の貉に関する認識と，人間と貉との具体的な相互作用としての「憑きもの」現象を，N町の調査事例から示してきた。これまでに提示したデータでは，十分な考察は不可能であるので，本章では，幾つかの分析枠組を提示し，それらの方法論の妥当性を検討しつつ，この奇妙な動物について考えてみたい。

貉の特性に関し前章まで繰り返し論じた点を，ここで一旦整理してみよう。まず初めに，N町の貉の認識には，動物種としての貉は「四つ足」「畜生」のカテゴリーに分類される一方，人間に憑く・人間を化かす・人間に益をもたらす「ケモノであってケモノでない」存在である，という2つのレベルがある点を指摘した。そして貉の属性には，他の動物にはない社会的性格がある点も強調した。つまりN町の人々が貉について語る際，その中には常に，いわば貉の超自然的性格と社会的性格というべき主題が見え隠れしている点が指摘できる。そして貉と人間の具体的な相互作用としての「憑きもの」現象を分析すると，「村」と「山」という，人間と貉のカテゴリーの区分が存在する点，貉憑きの原因は，貉のカテゴリーを侵犯した人間と貉の貪欲さ・妬み心の二つに求められる点を述べた。

まず上記の点は，我々を構造分析に誘うに十分な魅力を供えている。まず初めの，N町における貉の認識は，M. ダグラスの言う「変則性」の概念を想起させる。貉は確かに「ケモノであってケモノでない」動物である，という点では変則的である。しかしダグラスが変則的動物としたセンザンコウと貉では，なぜ変則的なのか，という点が大きく異なる。センザンコウは，レレ族においては，森に住みながら森の動物の持つ形態上・行動上の分類特性と整合しない，重複しているという点で「変則的」なのであるが，貉は動物分類上はあくまで「四つ足」「畜生」に分類されるのであって，むしろその変則性は他の動物との分類上の差異ではなく，観念上の人間との類似性に求められている。これらの点から，貉を変則的動物と安易に見なすのは危険である。

次に，貉が若干「境界」の観念と結び付く点を考察してみよう。時間的に見れば，貉は朝夕に出やすいと言われるし，空間的には，村境や峠に出現しやすいという説明をよく受ける。しかし，そこにも幾つかの問題点が存在する。細かなデータを提示するのは別の機会に譲るとして，これまでの調査では，具体的な個人の経験のレベルにおいて，貉と時間的・空間的境界との相関は見出せない。むしろ貉は伝説などのテクストにおいて，境界性と結びつけられる傾向にある。だが，この問題を考察するのは本稿の目的ではないので，これ以上は論じない[14]。ただ明確なことは，たとえ貉を境界的な動物と見なせたところで，それと貉の特性や貉憑きの現象との間に，一定のある関係性を設定することが不可能であるという点

である。

もう一つの可能性としては，貉：人間＝山：村という対立するカテゴリーから構造分析を行なう方法が残されている。村落空間論的枠組では，村は人間の支配する世界であり，村外は人間の統制がきかない自然の世界である。即ちこの文脈では村：山の対立は文化：自然の対立と言うことができる。ただ，このモデルを人間：貉の対立に当てはめると，またしても厄介な問題に出会ってしまう。それは貉の社会的性格である。嫁入りをしたり，名前があったり，親方がいるという貉の特性は，明らかに動物種として「自然」ではない。

ここで，貉の属性や由来を外的環境の分類に求める作業を中断して，もう一度貉の属性について再考してみよう。

山や峠で貉に餌をやらなかったことが「貉憑き」現象が起こる原因の一つであり，貉は食べ物が欲しくて人を騙すとも言われる。また，貉が憑いた状態としてしばしば指摘されるのは，過食である。このように，貉の話には食べ物が関係することが多い。その理由として頻繁に言われるのは，貉の持つ貪欲さである。貉は貪欲で執念深く，人が食べ物を持っているとそれのことを「妬んで」人に憑く，とも言われる。この貉のネガティブな側面は，N町の人々の間に根強いものがある。このように，貉は自己の欲望や感情を押えることができないのである。しかしながら，これらは貉独自の属性と言うことはできない。何故ならば，これまでの議論を含め，貉について多く語られている属性とは，ほとんど全てが人間の属性だからである。

人間の貪欲さ・妬み心は，呪詛や witchcraft という形態を取ってしばしば現われる。あるインフォーマントは，自分の家に良い事が起きても，それを他人に話してはいけない，言うと妬まれ横車が入る，即ち呪詛を受けたり生霊に憑かれると言う。また別のインフォーマントによれば，呪詛の知識は村落内の人々に共有された知識である。具体的な数は定かでないが，我々の現地調査においても，呪詛と witchcraft の事例は10例以上あり，実際呪詛によって肉親を失った人もいる。あるアリガタヤは，この人間の側面を次のように言う。「人間には訳のわからないところがある。それは動物の感情，即ち妬む心だ」と。

ここにおいて，我々はN町の「憑きもの」現象の構造に一歩近づくことができる。即ち，貉の特性とは同時に人間の特性でもあり，貉が人間に憑くのと同じ理由で，人間も人間に憑くのである。よって，貉に関して述べてきた問題は，人間に内在するある特定の感情や行為を意味しているとも言える。貉は，山に住む「四つ足」のカテゴリーの動物であるが，その社会的性格によって他の動物から差異化されるのと同時に，妬むという感情により他の動物からも差異化されるという，一種の「両義的存在である。しかし，この論理は同様に人間にも適用され得るものなのである。

以上の議論から指摘できる点をまとめてみよう。理論的には，我々は環境認識を基礎としたカテゴリー論や境界論に対し，注意深く接せねばならないという点である。確かにN町においても，村：山＝文化：自然というパラダイムを提示することは，民族誌的事象から可能であろう。だが，そこから直接，人間の領域である村：貉の領域としての山＝人間：動物＝文化：自然というモデルが構築不可能である点を，我々は再認識しなければならない。貉に関して言えば，その属性は分類論に基づくのではなく，「超自然的」あるいは「社会的」行為と感情に基づくのである。もう一点として，「貉憑き」現象それ自体を単独に分析することでは，この現象の正確な把握が不可能である点を指摘したい。N町においては，貉とは人間の鏡であり，人間と貉の「憑きもの」を含む相互作用は，人間同志の相互作用の変形である。すなわち，「貉憑き」現象において問われているのは，一種の「人間性」とでも言うべき問題なのである。

5. 結語にかえて

前章の考察において，貉という動物と「貉憑き」現象を分析する際の枠組を，若干ながら提示してきた。だがこれらの議論は，N町における人間と貉という動物の相互作用，そして全般的な「憑きもの」現象を分析する入口に過ぎない。まだ多くの問題点が残されている。それは，大きく分けて二点あると思われる。第一点は，何故貉に人間の属性が付与されたか，という問題である。今後の調査如何によっては，貉を巡る歴史的視座を導入することも必要であろう。もう一点としては，呪詛・生霊憑き，更に他の民俗事象との比較を，より記述的に行なう必要がある。しかしながら，その点に関しては，紙面の都合上別の機会に譲ることにする。

注

1) 日本民俗学における初期の事例研究としては喜田編(1975)がある。また，日本の憑きものの体系的な整理は，石塚(1959)，吉田(1972)の研究がある。
2) 石塚(1959)，吉田・綾部(1967)，吉田・上田(1969)，

吉田(1972), 石毛・松原・石森・森(1974), 吉田・板橋(1975), 板橋(1978)など。

3) 本稿で取り上げるN町の調査は, 1985年～1988年にかけて, 文学部吉田禎吾ゼミナールが行なった調査実習のデータに基づいている。筆者は, 本調査のチューターとして, 計5回の現地調査を行なった。調査は, N町の複数村落にまたがり実施されたため, 本稿ではN町という表現を用いたが, 以下の事例は全てある特定の地区からのものである。
4) これらは穴グマの形状や行動と非常に類似しているため, 筆者は貉＝穴グマと同定してよいと考える。宮沢(1978, p. 17) 参照。
5) 佐和田町史に, 昭和33年から34年にかけてホンドギツネを何度か放獣したが, 定着しなかったという記述がある(佐和田町史編さん委員会, 1988, p. 184)。
6) 両津市郷土博物館編, 1986, p. 213.
7) 山本によれば, 約100匹の貉の名が報告されている(山本, 1988, pp. 217-225)。
8) 山本, 1988. p. 259.
9) 前掲書。p. 76.
10) 前掲書。p. 253.
11) 前掲書。p. 223.
12) 吉田禎吾氏からの個人的示唆による。
13) 山本(1988)には, 7つの類話が載せられている。
14) この議論に関しては, Needham, 1979, pp. 43-47 参照。

謝 辞

本稿は本年5月17日に行なわれた, 慶応義塾大学人類学研究会第60回例会での発表を基にしている。当発表において, 宮家準文学部教授, 吉田禎吾元文学部客員教授から貴重なコメントを頂いた。この紙面を借りて感謝申し上げたい。また, 本調査に御協力頂いたN町の皆様にも感謝申し上げると同時に, 本調査を指導された吉田禎吾元文学部客員教授, 調査地では何度も御迷惑をかけた新潟大学の上田将教授に, 感謝とお詫びを申し上げたい。最後に, 本研究は, 吉田禎吾ゼミナールの諸君の根気強い調査なくしては不可能であったことを, ここに明記すべきであろう。教室では貉の議論を交わし, 調査地では共に何度か化かされもした島田真, 村田章子, 小林岳人, 仲川裕里, 粂川真菜, 迫口朋子他の諸君の努力に, 本稿が少しでも報いることができたならば幸いである。

参 考 文 献

メアリー・ダグラス 1966〔1985〕『汚穢と禁忌』塚本利明訳, 思潮社.
石毛直道・松平正毅・石森秀三・森和則 1974「カミ・つきもの・ヒト—島原半島の民間信仰をめぐって—」『季刊人類学』5(4)：3-71.
石塚尊俊 1959『日本の憑きもの』未来社.
板橋作美 1978「群馬県南西部におけるオサキモチ信仰とサンリンボー信仰の社会的意味」『民族学研究』43(2)：156-185.
喜田貞吉編, 山田野理夫補 1975『憑物』宝文館出版.
クロード・レヴィ＝ストロース 1962〔1976〕『野生の思考』大橋保夫訳, みすず書房.
宮沢光顕 1978『狸の話』有峰書店新社.
Needham, Rodney 1979 *Symbolic Classification.* Goodyear Publishing Compamny, INC.
両津市郷土博物館編 1986『海府の研究—北佐渡の漁撈習俗』両津史郷土博物館.
佐和田町史編さん委員会編 1988『佐和田町史 通史編 I』佐和田町教育委員会.
ロイ・ウィイス 1974〔1979〕『人間と動物』小松和彦訳, 紀伊國屋書店.
山本修之助 1988『佐渡貉の話 — 伝説と文献』佐渡郷土文化の会.
吉田禎吾 1972『日本の憑きもの—社会人類学的考察』中公新書.
吉田禎吾・綾部恒雄編 1967「西南日本村落における秩序と変貌」『九州大学教育学部比較教育文化研究施設紀要』18：1-106.
吉田禎吾・上田将編 1968「憑きもの現象と社会構造—社会人類学アプローチ」『九州大学教育学部紀要』14：125-143.
吉田禎吾・板橋作美 1975「群馬県Y部落における憑きものと社会構造」『民俗学研究』40(2)：146-150.